

なごや 文化情報

2025

Summer

No. 414

NAGOYA
Cultural
Information

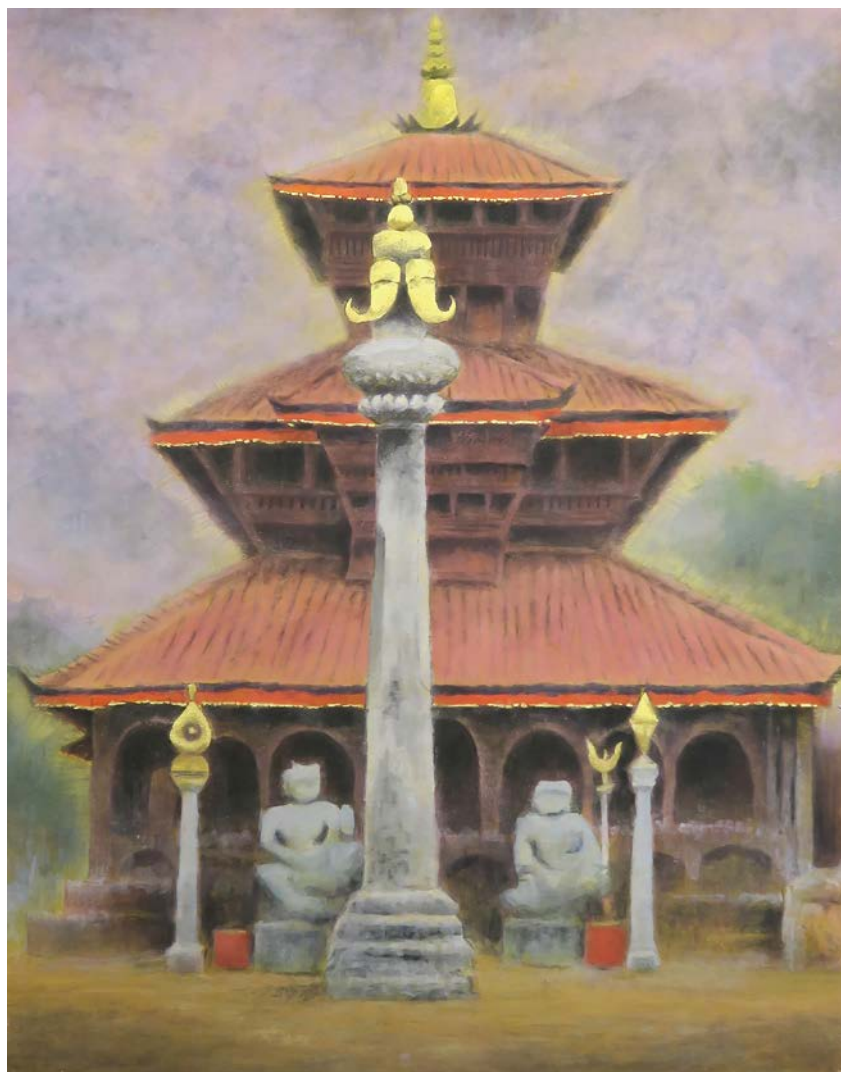
Pick Up Gallery／ギャラリースペースプリズム

随想／舞踊家 加藤おりはさん

この人と…／画家・名古屋芸術大学教授 吉本作次さん

視点／本がある場所で起きていること

#zoom up／大治太鼓尾張一座 打頭 若山 和さん



2025

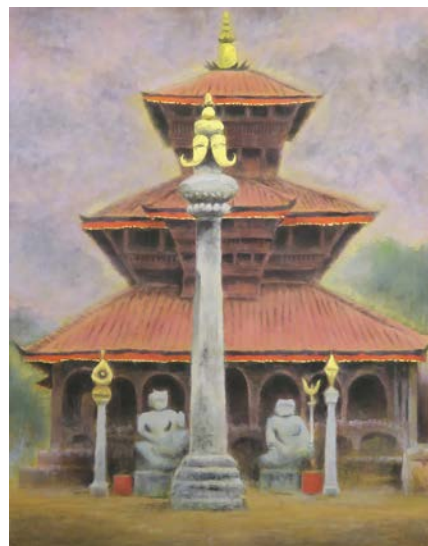
Summer

表紙

「バクタブルの寺院（ネパール）」

(2025年／和紙、岩絵具)

昨年訪れたネパールの古都、バクタブルにある寺院です。数年前の大地震により、壊滅的な打撃を受けたのですが、人々の努力により見事に往時の姿に再建されました。赤みを帯びた凛とした姿に感銘を受けました。



かとうてつお
加藤哲男

1978年 第14回白土会展に出品
1979年 名古屋造形芸術短期大学日本画専攻科修了
2011年 美術家集団ボン・デ・ザール展 招待
2023年 新風景の会 招待
個展、グループ展多数。

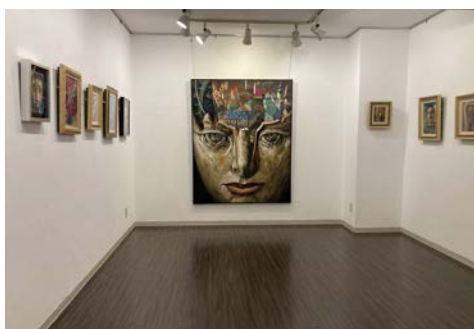
Contents

Pick Up Gallery	ギャラリースペースプリズム	2
随想	舞踊家 加藤おりはさん	3
この人と…	画家・名古屋芸術大学教授 吉本作次さん	4
視点	本がある場所で起きていること	8
#zoom up	大治太鼓尾張一座 打頭 若山 和さん	10

「なごや文化情報」編集委員

大寺資二（舞踊家・大寺資二バレエアカデミー主宰）
黒田杏子（ON READING）
小塚憲二（作曲家・編曲家）
鈴木敏春（美術批評・NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事）
常磐津綱鵬（常磐津奏者）
望月勝美（編集者・ライター）

Pick Up Gallery



ギャラリー内観

ギャラリースペースプリズム

1989年、名古屋で「世界デザイン博覧会」が開催された年、当ギャラリー主宰の高北幸矢はデザイン博に希望を持っていました。しかし、その多くは実現されませんでした。それなら自分でできることを形にしようと思い、「スペースプリズムデザイナーズギャラリー」を立ち上げました。良いデザインとは目的を的確に実現して形にすること、美はそこから必然的に生まれます。ギャラリーを運営していくうちにデザインの機能美だけではなく、心の豊かさを叶えるアートも伝えていきたいと思うようになりました。2009年、移転を機に「ギャラリースペースプリズム」として新たな出発をしました。私たちの暮らしの中で、もっとアートを楽しめる提案を積極的にしていこうと考えています。

設立 1989年 主宰 高北幸矢
住所 〒461-0001 名古屋市東区泉1丁目14-23
電話 052-953-1839

取り扱い作家 加藤鉦次、鈴木喜家、百瀬博、音部訓子、はまだのりこ、溝渕美穂、水野加奈子、高北幸矢 ほか
ウェブサイト <https://spaceprism.com>

随想

「わたしの信じる、うつくしさ」



舞踊家

かとう
加藤おりは

スペイン舞踊団Company DANZAC、五十鈴たたら舞主宰。平成30年度名古屋市芸術奨励賞
令和3年度名古屋市民芸術祭舞踊部門特別賞〈風焰賞〉、令和3年度愛知県芸術文化選奨文化賞を受賞。

うつくしさを思うとき、亡くなる前日の父の笑顔、そして祖母がぎゅっと握ってくれた手のあたたかさ…。泣きたくなるような、とても深く心をやりとりした感覚が広がります。いつかそんなふうに踊れるようになりたい、人と関わりたいと思います。

わたしは小さいころ、言葉にひどく混乱してしまう時期がありました。相手が、何を伝えたいのか理解できないし、自分も伝えられないので、一人で空想している時間が長かったです。現実はどこにあるのか分からないような日々でした。

植物が好きで、よく眺めたり、話しかけたりしながら、そのエネルギーに助けられていたので、人はこんなに不完全なのに、完璧なうつくしさを持つ自然界の頂点にいるように振る舞うのは、どうしてだろう、と思っていました。

人生の進路を決めるときに、「うつくしいと感じることができるのは、人間だけ」という言葉に出会い、霧が晴れるように、自分の生きていく意味をみつけた気持ちになったことを、今でもよく覚えています。

そして、たくさんのうつくしさをみつけないかと思ひ、舞踊家として生きることを決意しました。幼少期のことがなかったら、この道を選ばなかったように思います。

作品をつくるときはいつも、子どものころから

ずっと変わらず心の中心にある、水晶のようなものに触れに行きます。触れていると、すべてを超えていく感覚が確かにあり、わたしと、作品のエネルギーの源はそこにあるのかな、と思っています。とてもうつくしく、一体感があり、自分が生きていることを受け入れることができるし、自分以外の誰かも、世界も、受け入れることができます。

境界線を超えた何かをつくることに強く興味があるのは、証明したいのかもしれない、あらゆるものは繋がっていると。

自主公演「耀変 リズムに焼成される身体 dance x haiku」以来、この数年、俳句とスペイン舞踊を融合した作品を俳人の馬場駿吉先生と合作、共演を続けています。言葉と舞踊。言葉は世界とわたしを分断するものだと感じていたわたしにとって、大きな挑戦でした。

2025年6月末には、俳優の布施安寿香さん(SPAC)と共演します。言葉に身体はどんな反応をするのか、その行き着く先をみたい。

異なるジャンルのエネルギーはそのままに、形式を超えて本質で繋がること。

あらゆるものが一体となった宇宙の根源の景色、自然の力の極められたような場所で、わたしはこれからも、自分の信じるうつくしさに挑戦していきたいと思っています。

この人と...



画家・名古屋芸術大学教授

よし もと さく じ

吉本作次さん

絵画の道行き、絵画論の本質

1980年代にニューペインティングの旗手として、現代美術のアートシーンで鮮烈なデビューを果たした画家の吉本作次さん。1990年代以降は、新たな表現を模索し中国絵画の筆法から「線」の要素を取り入れるなどの創作を続け、2005年から名古屋芸術大学教授として後進の指導にもあたっています。2024年には名古屋市美術館で大規模な回顧展も開催した吉本さんにお話を伺いました。
(聞き手：鈴木敏春)

各地を転々とした幼少期

幼少期は、親の転勤がすごく多くて、各地を転々としていました。理由はよくわかりませんが、父は喧嘩早い人だったので、多分上司と揉めてすぐに辞めてしまったからかなと思っています（笑）。父は、三重大学医学部を卒業して医師として津市高茶屋というところで暮らしていましたが、その後、岐阜県の国立病院に転勤し、1959年に僕が生まれました。でも、1歳半で高知県へ移ったので、生まれ故郷のはっきりとした記憶はありません。その後、高知県の幼稚園に3歳半頃まで通い、次は滋賀県。この時父は大津市の和邇というところにある療養所に転勤しました。小学2年生が終わるまででしたが、その療養所の周辺は、いわゆる国定公園になっているような自然が多い場所でした。大津市で育ったことはすごく記憶に残っています。雪が子どもの腰まで降る。夏場は琵琶湖で泳いで、ホテルが家の中に入ってきたり、療養所の渡り廊下を鹿が行き来したり、今から考えると幸せな時間だったなと思います。自分の原型はそこで出来たような気がします。高知県で過ごしたことも記憶が薄い割に、大人になって妻と一緒に訪れた際に、妻から「なんか、この木って吉本さんの絵そっくり」とか、高知城に登って見下ろした時に見える木の形が「吉本さんっぽい」と言われました。母に聞いたら「子どもの頃、お前、高知城に登ったよ」と言うので、うっすらどこかに記憶が残っているのかもしれない。その後、三重県の桑名市に引っ越しました。

桑名市での生活が人生で一番長く、今も実家があります。父はもう他界していますが、90歳の母は今も健在です。子どもの頃は画家になるとは思っていませんでしたが、もしかしたら、ロマンチストな父とセンスの良い母の気質を受け継いだのかもしれない。



高知県桂浜にて。2〜3歳ごろ、父に肩車されて。

高校生活と美術大学受験

高校は、当時男子校（2021年から男女共学）だった四日市市の海星高校に進みました。良かったなと思うのが、美術部がちょっと梁山泊的だったことです。美術教室が職員室から少し離れていたの、少々悪さをしてもらえない（笑）。美術の先生は週に1回ふらっと来るような感じで、生徒の独立意識が強かったです。同級生は愛知県立芸術大学（以下、県芸大）とか多摩美術大学、武蔵野美術大学へ行くような優秀な連中ばかりでした。僕はというと、二浪しても全然受からない。美大受験というものが全くわかっていなかったんです。つまり、受かるためのデッサンというものがあることは薄々わかっていたのですが、自分が良いと思う絵を描いて入学できると、どこかで信じ込んでいました。県芸大を受験した時に、河合塾で習っていた講師が県

芸大でも助手をされていたので、デッサンする僕の後ろに来て、「いい絵だね。絶対落ちるけど!」と言われたこともありました。入学試験中なのに不合格が確定していたんです（笑）。浪人をしているにも関わらず、ろくに石膏デッサンもやらず、自分の描きたい絵しか描いて来なかったのが、今なら「それでは不合格でも当然」と納得できるけど、逆にそれが良かったのかな（笑）。大学受験は全部落ちたけど、名古屋芸術大学に補欠で拾ってもらいました。今でも職場としてお世話になっています（笑）。

1980年代、東京より活気があった 名古屋の美術業界

受験生の頃は1970年代の後半でしたが、アキライケダギャラリーができた、桜画廊、ギャラリーたかぎなどが既がありました。続く80年代は現代美術が流行っていて、当時の名古屋がどんな状況だったかということ、もう少し記録に残しておきたいと思います。何故か80年代の美術業界は何事も無かったように思われているようです。90年代とは違って、批評家たちが80年代というものを全く評価していないということもあるからかもしれません。以前、ある高名な美術評論家の方が名古屋芸術大学で講演された時に、60年代、70年代の動向を説明して、80年代が来るかなと思ったら90年代に飛んだ。そういう講演があったくらい、80年代の美術は今、不遇な扱いです。サブカルチャー系の音楽とかファッションとかはブームが来ていると思うのですが、逆に美術はずっと来ない。なぜだろう、というのが最近の自分の研究課題にもなっています。

80年代の名古屋の美術というのは、全国的に注目されていました。辰野登恵子（1950～2014）さんが名古屋で作品を発表するなど、東京より活気があって「名古屋では現代美術の作品が売れる」と言われたくらいです。僕は細かい記録とかアーカイブスが苦手ですが、生き字引だった人たちがどんどん亡くなっていて、歴史というのは残さないと無くなるということを歳とともに改めて感じます。

80年代、デビュー当時の創作活動

大学に入って2年ぐらひは、どちらかというとコンセプチュアル・アートとかアメリカ型のパフォーマンスとかアースワークに興味があったのですが、ちょうど80年代に入った辺りでキース・ヘリング（1958～1990）やジャン＝ミシェル・バスキア（1960～1988）が流行りました。しかも美術雑誌ではなく、最初に「BRUTUS」（1980年創刊のライフスタイル情報誌）などで取り上げられていました。サブカルチャー的な入り口ですね。僕もニューペインティングの旗手という感じで取り上げられました。当時は、マイケル・ジャクソ

ンとかプリンスのミュージックプロモーションビデオがテレビで流れて、きっと外国だったら、こういう風に美術も評価されるだろうなって、勝手に上昇志向を膨らませて、周りの大人たちの^{ひんしゅく}を貰っていましたが、それでも世界に太いパイプが繋がっている名古屋のアキライケダギャラリー（現：イケダギャラリー東京）



大学3年生。大学のアトリエにて。（1982年）

に作品を扱っていただけたことが、人生に大きく影響したと思います。僕は弱い人間なので心が簡単に折れるし、虚勢だけ張って、とにかくでかい絵を描いて納得させようと力んでいました。

学生時代は、お金がないのでペンキでキャンバスに描いていました。キャンバスを壁に直接貼り付けて、出来が良かったらパネルや木枠に貼ることにして、後は寸法を測って自分で材木を切って木枠を作っていました。とにかく当時はでかい絵を描くということに燃えていましたが、今思えば絵のサイズ自体にはそんなに意味はないなと思います。でも身体的に10メートルの絵を描くのとは1メートルの絵を描くのは全く違うことなので、それを若いうちにできて良かったかなと思います。

当時描いていたような即興的な絵は、ちょっと油断するとすぐマンネリになっちゃうんです。僕は実存型と呼んでいますが、自分の内面から感覚で出していくような絵は、魂が乗らないと、ただ絵の具がキャンバスに乗っているだけになってしまいます。そこを何とか絞り出して、その日のうちに決着つけて帰るぞ、という感じでやっていたので、いつもアトリエに行くときは、自分のテンションを上げて行っていました（笑）。で、そういう気分だから、すぐ癪癪を起こしてしまう。テニスのマッケンロー選手ではないですが、ラケットを折るのと同じ感覚で、画面に投げつけた筆が刺さってしまったこともありました。もともと多動症気質で、その気質をそのままリンクさせて描いていたので、1日1時間半ぐらひで一気に勝負をかけるような感じでした。



卒業後、大学近くのアトリエで制作。（1987年）

大学を出て2年後の1986年には東京のスパイラルギャラリーと原美術館で、ほぼ同時期に展覧会をしました。原美術館では、ちょうど同世代だった中原浩大（1961～）

さんや青木野枝（1958～）さんも出展しました。その頃、今思うと少し早かったかなと思いますが、ニューヨーク行きを勧められて、しかも住居を提供してくださる方がいたので、渡米を決意しました。

ニューヨークでの出会い・帰国

ニューヨークでは、いろいろな作家に会い、美術館やギャラリーを觀て回りました。そこで魅力を与え続けるものは残る、という凄みを感じました。折角アメリカに来たのですから



ニューヨークのギャラリーで
個展準備中の様子。（1989年）

らメトロポリタン美術館を觀に行きました。当時は気持ちとしていくらか支払えば入場できたので、毎日10セント入れて觀に行っていましたが、毎日觀ていても全く飽きない。それと比べて現代美術は、最初のインパクトは大き

くても徐々に慣れてくる。現代美術はずっと觀ていて面白いものでもないな、自分がやりたい美術は現代美術ではないのかとも思い始めると、もう作家としてかなり危うい状況が生まれて、自分が発表している場所とか生きている世界と、やりたいことがずれてきてしまったんです。そんな時、ニューヨーク・タイムズの美術記者の方から「絵が觀たいならヨーロッパに行くしかないでしょ」とアドバイスされて、89年の2回目の渡米時に、ニューヨークからヨーロッパへ渡り、各地の美術館で作品を觀て回りました。



イタリア・ブラーノ島にて。
とにかく古い物をたくさん見る。（1989年）

86年の最初のニューヨーク滞在中は、偶然ジャスパー・ジョーンズ（1930～）さんが近所に住んでいたの、訪ねて行って、ご飯も作ってもらって、一緒に映画も觀に行きました。かなり貴重で得がたい経験だったはずですが、経験が自分の中で肥やしになるにはまだ早かったようで、帰国後、早速スランプに陥りました。それでも何回かの展覧会をこなしたのですが、89年あたりには「これ以上描いたら

僕はもう死ぬ」と思うようになってしまいました。だいたい僕は精神が柔なので、ちょっと辛いとすぐ弱音を吐いてしまうのですが、そんな僕を見て、妻から「死んだら困るから一度ギャラリーをやめてみたら?」と言われ、「その手もあるか」と思って（笑）。周りからは止められましたが、一時期ギャラリーでの発表をやめてしまいました。90年代の初頭は、自分にとって地獄のような日々で、体調も悪く、ひと月に3回くらい風邪をひいていました。そんな中テレビで、なんでも鑑定団がやっているのを見て、古くから伝わるものを何も知らないのを見て回ろうと思い立ち、筆を買って一生懸命崩し字の練習をしたり、愛知県陶磁美術館をはじめ色々な焼き物の美術館を巡ってみたい、信楽に行ったり、奈良県の古梅園という墨づくり



ニューヨークの街角でビザを
ぼおぼる。（1989年）

の老舗に行って墨の違いを勉強したりしました。学生に戻った気分で勉強、というか、毎日閉館時間まで図書館にいて、その後いっぱい借りた本を安レストランに持って行ってワインを飲みながら読むという生活でした。

だから、若者が抱く、まだ何者でもない自分に対する不安感や、何者としても扱ってもらえない恐怖がよくわかります。よく学生がダラダラしていると甘えていると言う人がいるけど、大抵そうなるのです。自分はこうだというのが見つければそれに向かって邁進できますが、ちょっとでもそれに不安があると、こんなことやっていいのかな、と迷います。日本は褒めるよりもけなしてしまうことが多いので、さんざん否定されます。でも、仲間同士で作品を褒め合い「傷はなめ合って治せばいい」と思います（笑）。美術の世界というのは、心が折れたら終わり、主觀が生命線の世界、自分が迷い始めたらあっという間に崩れてしまう世界です。絵を描くというのは、今の絵の状態じゃダメだということを確認しに行って、どうしたら良いか見つけてくるようなことなのであり、安易にダメ出しをしてもいいものは絶対に出てきません。

若い芸術家を指導して思うこと

80年代の後半ぐらいから9年間ほど非常勤講師として大学へ行っていました。当時は半ば遊びに行っているような気分でしたが、2005年に改めて教授職で呼んでいただいた時は、「僕に先生ができるのか?」と不安に思いました。

大学で働いていると、学生の傷つくさまがすごく伝わってきます。僕が学生の頃は、傲慢にも、つまらない絵を描いている教師の批評は聞かないようにしていましたが、僕が接する学生たちは著しく自信を失っていて、言葉による批評が

かなり心に突き刺さってしまうようです。

また、自分が描こうと思ったことをもう誰かが描いていると知った途端に描けなくなることがあります。例えばゲルハルト・リヒター（1932～）が凄く取り沙汰されていた頃だと、「私のやりたいことをみんなリヒターがやっている」と思うわけですね。オリジナリティを求められて、「こんなことは既にやられている」じゃあ何を描いたらいい？ ということの繰り返しで、「自由に描いて」と言われて何を描けばいいかわからなくなるということは、美大の学生にはよくあります。

学生と関わることはすごく好きで、ありがたい仕事をいただいたなと思っています。よく「才能」で片付けられがちですが、持って生まれた器用さだけでは作品になりません。美意識や判断力という主観を磨き上げることが大切だと思います。僕自身、高校時代の同級生たちと比べると技術や忍耐力では劣りますが、なぜか判断力だけは自信がありました。学生にも、「僕たちの仕事は主観が大事。自分の中の判断を日ごろから心がけて、自分自身と対話するように」と伝えています。

同時に、いつも考えていることですが、何かスペシャルなものを創る人がもっと尊敬されるとよいなと思います。圧倒的な個人の力への敬意でしょうか。音楽でも舞台でも、この人が立っただけで全然違うというようなことがありますよね。大勢で作品を共同制作することとても大切ですが、そういう個人への敬意を無しにして、「みんなでアート」というのは、また別のことかなと思います。僕は美術作品というのは繊細なもので、とても大切に扱うべきだと思っています。例えば、作品に額をつけるかどうかで悩んでいる卒業生が、「額縁に入れると自分の作品と関係ないものが回りにくっついていく感じがするし、なんか権威的な感じがするから嫌なんです」と言っていました。反面、額縁をつけることで、これはすごく大事なものですよ、という扱いをしているようにも感じられます。僕はよく茶室に例えますが、躰り口から入ると、そこに床の間があり、掛け軸があって、そこに気持ちを寄せていくための距離感みたいなものが生まれます。そういった美術作品を鑑賞するための環境も大切だと思っています。特に雑多な街の中からいきなり美術の世界に気持ちを切り替えられないので、美術館のエントランスやその空気感とかを徐々に感じながら気持ちを切り替えていけることが必要だと思います。

画家として絵を描くこと

年齢を重ねたことで、夭逝した作家に対して憐憫の情を覚えるようになりました。死んでしまったらその先に成長はない。例えばバスキアなら、27歳で完結しなくてはいけない人生だったと思うと、作品に対する印象がずいぶん変わってきます。おそらく、自分がバスキアより何十歳も年上に



名古屋市美術館「特別展 吉本作次 絵画の道行き」（2024年）

なったからだと思います。普通は60歳を過ぎた辺りから少しずつ活動が停滞していくように感じられますが、作家は長生きして、還暦を過ぎてなお、というような時間的余裕が欲しいなと。与謝蕪村や浦上玉堂は歳をとってから素晴らしい作品を残しました。僕は文人画家のような隠遁生活に憧れています。誰にも知られず、田中一村のように知られざる画家として生きていきたい。そう言うと、名古屋の街中で卒業生たちとしゃべってお酒を飲んで、なにが隠遁生活だと笑われますが（笑）。

また、最近の美術に対する感覚がビジネス的になっていることには違和感があります。美術を盛り上げようという人は、まず作品を売る話をしますが、それは後からついてくることであって、まずは描きたいから描く。創作活動を楽しんでいるからこそ面白い表現が生まれてくるのではないのでしょうか。

学校の講義などで「芸術って何でしょう？」という話になることがあります。それぞれが持っている美意識が発露できればいいと思っているので、同じものを目指す必要は全然ないのです。「芸術」とは、形容詞のように捉えた方がいいと思っています。「美しい」という言葉と同じように、「芸術い」ものがあるということで、それは人によって少しずつ違うので綺麗に定義できるようなものではありません。「これ芸術いね」とか「これアートいね」のような、「尊い」とかいう感覚に近いものとして捉えた方がいいと思います。なにか「芸術」という枠組が存在していて、出来がいいけどその枠組にあてはまらないから「芸術ではない」とか、つまらない作品でもその枠組に入っているから「芸術」のように判断するのはおかしいことだと思います。ハイカルチャーもサブカルチャーも関係ありません。僕は、「ここまでいくんだ」という限界のない表現を観てみたいと思っていますし、もしそれが自分の作品なら最高なんですけどね！



日進市のアトリエにて。
（2024年）

本がある場所で起きていること

公共図書館とは別に、個人で自発的に本がある場所を立ち上げる人たちがいる。「マイクロ・ライブラリー」と呼ばれるそうした小さな図書館活動は、商店街や病院、学校などと連携を取ったり、カフェやコワーキングスペースの機能を持たせたりと運営スタイルはさまざまながら、今では全国で1500箇所以上の事例がある。近年、名古屋市内で新しく「本がある場所」を立ち上げた三組にお話を伺った。

(まとめ:黒田杏子)

子どもたちと本好きの大人の居場所

名古屋市名東区の「私設図書館もん」は本の閲覧、貸出のほか、カフェやレンタルスペースなどの機能も持つ。館長の土山昂也さんは、20歳代後半に本を通じて環境問題などの社会問題に触れたことを契機に仕事を辞め、ボランティアをしながら全国を旅をしてまわった。そのうちに少子化が進む中で自殺や不登校が増加している日本の子どもたちの状況に危機感を覚え「子どもたちのために何かしたい」と思うようになった。

「私設図書館」という場所を知ったのは、旅先で訪れた本屋だった。高松市の古本屋「な夕書」で『子どもたちの放課後を救え!』*という本を購入したところ、広島県尾道市の私設図書館「さんさん舎」を紹介された。「僕が訪れた日は平日の昼間で、不登校の子どもとその親が店番をしていました。親子が絵本を読んでいたり、リモートワークをしている人がいたり」と皆が自由に過ごしている様子がとても良かったんです。本は、知らない世界や、物語の世界に接続できる。僕自身も本に世界を広げてもらったので、そこに行けば世界や情報に接続できるような場所を作りたい、と思いました」。



土山昂也さん（私設図書館もん）

そして2022年3月に現在の場所でオープン。偶然、近くに友人一家が住んでいたことも幸いし、当初から近所の子もたちで賑わう場になった。本やコーヒーが好きな大人たちも噂を聞きつけ全国から足を運ぶ。現在は、カフェとレンタルスペース、棚貸し、一部の蔵書は販売もしているほか、サポートメンバーのシステムもあるが、運営資金は常に悩みの種だという。店内の左右の壁はぎっしりと並べられた本棚にぐるりと取り囲

まれている。「本棚に並ぶ本たちが、この場所の自己紹介をしてくれています。あまり読まない子もいますが、子どもたちが当たり前にも本に触れられる場所が必要だと思っています」。

2年前からは共同で「じぶんのたね」という学校活動も始めた。「学校以外の選択肢として、子どもたちの学びと成長を支える活動をしています。その日何をするかは自主性に任せています。昼ごはんは子どもたち自身でメニューを考え、買い出しに行き調理します。大人はなるべく手を出さない。そうすると失敗を自分で発見して、次回に活かしていくんです。ここで過ごしているだけで、国語・算数・理科・社会など、生きるのに必要な学びにつながっているんです」。開館から3年が経った。今後の目標を聞くと、土山さんは「よく自分もやりたいという方が話を聞きに来てくれるんですが、資金面につまづいて躊躇してしまう。僕もまだまだ悩みながらやっていますが、今後は全国でこのような活動を広げるお手伝いをしたいです」と話してくれた。



私設図書館もん

本を介して人と人が出会う

名古屋市南区、笠寺観音の参道にある「casa della biblioteca かさでら図書館」は、一箱本棚オーナー制度で運営する私設図書館。約90組の本棚オーナーが選んだ本を、読んだり借りたりすることができる。主宰の八町順子さんと坂本直子さんは、

名古屋市が主催するまちづくりの講座に参加したことがきっかけで、この地で私設図書館を開くことになった。お話を伺った八町さんは、いつかブックカフェやブックバーをやりたいと思っていたのだそう。「思っていた形とは少し違うけど、本に囲まれているだけで幸せです」と八町さんは笑う。本棚を借りているオーナーも個性豊か。「島」や「くじら」などひとつのテーマにしぼって関連する本だけを集めた棚や、同じタイトルの小説を単行本と文庫本をセットにして並べている棚、手作りの小物を本と一緒に展開している棚など、一人一人が工夫して編集している。近隣だけでなく県外から参加している人も少なくないという。また、本棚オーナーの経験をステップに次なる挑戦をする方もいる。「よしかつ歯科」さんはご自身の病院に図書室を作って患者さんが集える場をつくった。「ブタコヤブックス」さんは今夏、同じ笠寺地区で書店を開業する。他にも高校受験の合格祝いに、子どものために棚を借りたお母さんも。お子さんは今春で高校三年生。今では自身で本のイベントを企画しているという。

「本を介して人と人が出会うのを見ているのが楽しい。毎日、何かが起きるんです。ここで起きたことや聞いた話を、本にまとめられたらと思っています」と八町さん。取材に訪れた日も、近所の親子が本の返却をしにきた。子どもは右腕に包帯を巻いているが、運動ができない分、読書がはかどるのかもしれない。嬉しそうに本を借りて帰っていく。読書離れと言われる現代だが、本を求めている人は確実にいる。それを実感できる場だと思った。



八町順子さん
(casa della biblioteca かさでら図書館)

手探りで小さく開く

名古屋市南区の築70年の古民家スペース「まちのお茶の間 菅原商店」は、2023年の12月にオープンした。運営しているのは、まちづくりや観光に関わる仕事を中心にフリーランスで働いている菅原裕人さん、春香さん。ここはおふたりの事務所でありながら不定期で場を開いており、壁一面の本棚には1000冊を超える本が並ぶ。「最初に利用料（90分800円）をいただいて自由に過ごしていただいています。本を読んだりお茶を飲んだり、日記や絵葉書を書いている人やパソコン作業をしている人もいます。本はありますが、目的を狭めたくないで私設図書館という言い方はしていません。おばあちゃん家

のお茶の間みたいな場所だと思ってもらえたら嬉しいです」（裕人さん）。

春香さんは、6年間勤めた会社を辞めたあと、全国を旅してさまざまな働き方をしている人と出会って話を聞き、自身も複数の仕事をしながら自由に働くことを選んだ。「同世代の友人と話していると、仕事に対する悩みを抱えている人が多いんです。そういう人たちが日常から離れてひと休みできる場所を作れたらと、一緒にごはんを食べる会や、働くことについて話す会も開催しています。私たちもいわゆる会社員とは違う特殊な働き方をしているので、少しでもヒントがお渡しできたら」（春香さん）。

利用者と話をするときにも本は役立っているという。「この本好きなんですね、と話しかけてもらえたり、お話ししていく中で、合いそうな本をお薦めしたりすることもあります。本のおかげで深くお話ができていますと感じます。目的なく来られた方も、本があれば手持ち無沙汰にならない。本があることで、ここにいていいって伝えることができるんです」（裕人さん）。オープンから1年が経った感触をお伺いすると「まずは自分たちが出合いを楽しみながら、小さく場を開くことを続けていきたいです」と春香さん。「場所もまだまだ育て中ってことで」と笑うふたりには、自分たちのペースで生きていくことを選んでいる人ゆえの、気持ちのよい空気が流れていた。



まちのお茶の間 菅原商店

本はつなぐ

取材した三組の言葉からは、本が優れた“道具”として場に機能していることが感じられた。本は人と人をつなぐものであり、人と世界をつなぐものであり、人が自分自身を知る窓でもある。一冊の本から未来へも過去へも旅をすることができる。書店も図書館もない自治体が全国の市町村の15%に及ぶというが、暮らしの中に当たり前のように本に触れられる場がなくなってしまうのは、特に子どもたちや若い人の未来にとって大きな損失である。だが、こうして個人で本がある場を開く人があれば、そこで得た本との出会いが、次の一冊へと手をのばさせるだろう。最初の一步は小さくとも、きっとその種は風にのって遠くまで運ばれていく。本がある場はきっと、なくなるはない。

※『子どもたちの放課後を救え!』（川上敬二郎・著）文藝春秋

#zoom up

ズーム・アップ

大治太鼓尾張一座 打頭

わか やま かず

若山 和さん

「和太鼓」と聞いて真っ先に想像するのは、盆踊りなどのお祭りという方も多いと思います。和太鼓にはジャンルがあるのをご存知でしょうか。神事として、神様を迎えるために演奏する「奉納太鼓」、イベントや興行などで演奏する「創作太鼓」。この両方の太鼓のスペシャリストとして、名古屋、尾張地方のみならず、東京や海外でも、舞台、映画や企業のプロモーションビデオなど多岐にわたって活躍中の若山和さんにお話を伺いました。



(聞き手：杵屋六春)

男子が生まれたら太鼓を買う風習

私は愛知県大治町の出身で、男子が生まれると太鼓を買うという地域の習慣があり、物心がつけばそこに太鼓があるという環境で育ちました。

大治町は、海拔が低く、水害の多い地域であったこともあり、五穀豊穡や住民の安全を祈願して、伊勢神宮や熱田神宮などで奉納されている神楽（神をまつために奏する舞楽）の流れを受け継ぐ太鼓が、神社のお祭りで演奏されていました。父（若山善之さん）は農業の傍ら、祭りの太鼓を指導する立場にありました。昭和56年、太鼓が好きだった当時の大治町長によって、12の地域でバラバラだった太鼓を、文化活性化活動として一つにまとめようという話が持ち上がり、大治町太鼓教室が開催されました。そして、竹下登内閣が掲げた「ふるさと創生事業」の一環として、江戸時代から伝わる『神楽太鼓』『嫁獅子』の保存・継承を目的とした『大治太鼓保存会』が平成4年に設立されました。初代会長には父が就任し、現在も会長として後進の指導を続けています。今では、『神楽太鼓』『嫁獅子』は大治町無形民俗文化財にも認定されています。そんな環境に育ったため、太鼓を稽古しない選択肢はなく、自然に太鼓を始めることになりました。兄と妹を含む3人兄妹でしたが、兄と妹ももちろん同様で、一家総出で太鼓をしていました。



子ども神楽 中学1年生の頃

父の勧めで大江戸助六太鼓へ

父は保存会発足に合わせて、町から町独自の太鼓曲創作も依頼されていました。同じ時期に父は、日本三大太鼓の一つと言われる助六太鼓を継承し、1982年に発足した大江戸助六太鼓の演奏を聞いて惚れ込んでいて、私たち兄弟にこの団体に修業するように言い、四歳違いの兄が高校2年生、私が中学2年生の時、2人で入門しました。大江戸助六太鼓は、江戸時代から伝わる歌舞伎や長唄などを研鑽し、東京の盆太鼓スタイルであった斜め台による打法を創作和太鼓に取り入れた、東京初のプロ和太鼓集団です。当時の自分は、新幹線に乗って東京に行ける！と軽い気持ちで入門しましたが、現実には甘くありませんでした（笑）。まず、それまでの太鼓とは打ち方が全然違いました。プロ育成の団体でしたので、師匠（大江戸助六太鼓宗家の小林正道さん）の指導も厳しく、入門してすぐに手の皮がめくれて手のひらが血だらけになり、合宿に行けば、ものすごい練習量で腕が全く上がらなくなるといった日々が続きました。友人たちは学生生活や部活などで青春を謳歌していたので、「なぜこんなことをしなければならないのだろう？」と疑問を持つようになりました。高校に入学し、自分も部活に入りたいと思い、スキー部に入部しました。部活動はとても楽しく、高校3年生でキャプテンになりました。高校入学当初は、大江戸助六太鼓の他の仲間たちと同様に、学生生活と太鼓の両立のバランスに悩んでいましたが、在学中、大江戸助六太鼓の手伝い演奏の活動が増えていき、こちらは休むことはもちろん許されないため、部活動の方は副キャプテンの助けを借りて、なんとか乗り切ることが出来ました。舞台での演奏が増えていくとともに太鼓への情熱も高まり、高校卒業後はプロを目指すことに決めました。当時、ありがたいことに、師匠から「大



大江戸助六太鼓での演奏

江戸助六太鼓専属演奏者として入団しないか」とお声がけいただきました。しかし、いよいよプロの道へ進もうと思って矢先、父に反対されました。大学に進学しなかった父は、自分の子どもたちには大学に進学してほしいと強く願っていました。その思いを汲んで、私は大学進学を決めました。進学後も太鼓を続けつつ、友人もたくさんでき、思っていた以上に充実した大学生生活を過ごすことができました。

念願のプロへの道から後進の指導へ

大学卒業後、再び師匠から「大江戸助六太鼓の専属演奏者にならないか」とお声がけをいただきました。しかし、その頃、大治太鼓保存会の生徒数が増え、演奏活動も活発になってきました。指導者、演奏者の一員として活動していた私が抜けてしまうと大変困った状況になると思い、また家族の希望もあったため、このまま大治太鼓保存会の指導者としての道を選びました。大江戸助六太鼓には特待生制度があり、特待生として大江戸助六太鼓にも参加が許されたので、東京での演奏活動も並行してできるようになったことをとても感謝しています。



大治太鼓発表会

映画出演も！活動は演奏、指導だけじゃない

2000年に保存会の若手指導者7名を集め、新たなプロ集団「大治太鼓尾張一座」を立ち上げました。「日本の太鼓」「あいちトリエンナーレ2010～大祭2010～」「天皇陛下御即位奉祝・愛知県民祭典」など、様々な大舞台で演奏する姿を保存会の子どもたちに観てもらい、自分たちもプロ奏者になりたい！と憧れの存在になれるよう、座員一同で日々研鑽を積んでいます。次世代の演奏家育成は大切な課題と捉



天皇陛下御即位奉祝・愛知県民祭典

え、義務教育で太鼓を体験できる方法を模索するなど裾野を広げる活動も進めています。



愛知県主催 伝統芸能出張講座

大友啓史監督の太鼓好きがご縁で、2023年には木村拓哉さん主演映画「レジェンド&バタフライ」に出演し、太鼓演奏もしました。色々なシーンで太鼓の演奏が流れ、タイトルバックのクレジットに自分の名前を見つけたときは感無量でした。



映画「レジェンド&バタフライ」撮影現場にて

また、2024年にNHKホールで開かれた「第24回地域伝統芸能まつり」に出演する際には、プロデューサーから「伝統芸能を保存継承しているだけでなく、創作太鼓も兼ね備えた演奏を全国の視聴者に知って欲しい」と依頼され、自身や一座の活動を認めていただけたことを嬉しく思いました。

さらに、トヨタヴェルブリッツ（ラグビーチーム）のプロモーションビデオで、イメージキャラクターの雷神に扮して太鼓を演奏していますので、ぜひ検索してご覧いただけると嬉しいです。



◀トヨタヴェルブリッツInstagram QRコード

～インタビューを終えて～

若山さんにとって「太鼓とは」の問いに、「人生を華やかにする宝です」と答えてくれました。太鼓の音色は、町や人の心を元気に、華やかにしてくれます。元気をもらいに演奏会に出かけてみてはいかがでしょうか。

なごや文化は寄附でもつ



名古屋市文化基金

支援・育成事業

— 市民やアーティストによる文化芸術活動を支援・育成 —



参加・体験事業

— 市民だれもが参加できるワークショップ・公演等を実施 —



鑑賞事業

— 優れた舞台芸術を鑑賞する機会を提供 —



市民文化の情報発信

— 情報誌の刊行などを通して、様々な文化情報を発信 —



皆さまからいただいた寄附金を活用し、なごや文化創造のための様々な事業を展開しています！

名古屋市文化基金の詳細および
寄附のお申込みはこちらご寄附に関する
お問い合わせ名古屋市観光文化交流局
文化芸術推進課
TEL 052-972-3172公益財団法人
名古屋市文化振興事業団
TEL 052-249-9390叙勲・褒章
表彰状レプリカ
製作サービス

- ◆ 印刷のプロが1点1点手作業で複製します。
- ◆ 用紙にもこだわり実物に近いものを採用。



お問い合わせはこちらへ

駒田印刷株式会社 tel.052-331-8881
〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 https://www.kp-c.co.jp

旭日中 叙章を授与する
皇居において璽をおさせる

令和五年五月三
内閣総理大臣 菅

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ舞台音響／映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

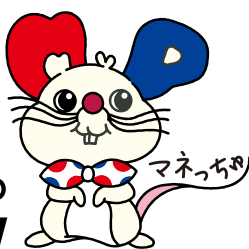
20Hz ← → 20kHz

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市中区千種区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネジメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

MANAGEMENT PRO
株式会社 マネージメント・プロ

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

- ◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。
- ◎毎月24,000部発行
- ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM 等にて配布

〒461-0004 名古屋市中区葵2-11-22 アバンテッジ葵ビル301

TEL: (052) 508-5095

FAX: (052) 508-5097

Web: www.mane-pro.com

E-mail: mane-pro@mane-pro.com